

韓国人ニューカマー若者にとっての「ヘイトスピーチ」

朴 慧原

I. はじめに

昨今、「差別的憎悪表現」と称される「ヘイトスピーチ」という語がニュースや新聞などで見聞きされるようになった。それに関する研究も数多く行われており、ヘイトスピーチという現象に対する日本社会の関心はますます高まっている。そこで焦点になっているのは、主に「在特会（在日特権を許さない市民の会）」と「しばき隊（レイシストをしばき隊）」というヘイトスピーチを行う人たちとそれに反対する人たちである（安田 [2012]、松岡 [2014]、山崎 [2015] など）。

一方、ヘイトスピーチの対象となる側に関しては相対的に関心が低く、少ないながらも存在する研究はほぼ在日韓国・朝鮮人、いわゆる「在日」とよばれるオールドカマー⁽¹⁾に集中している（野間 [2013]、中村 [2014]）。しかし、ヘイトスピーチの対象には、オールドカマー以外にも多様な存在が含まれている。そのなかでも本稿が注目したいのは韓国人ニューカマーである。

周知のようにヘイトスピーチを主導しているのは在特会という団体である。2007年に設立されたこの団体はそれまで主にネット上で見られていた過激な人種差別表現を街頭に持ち込む形で活動⁽²⁾を行っている。団体の名前や彼らの主な言動は、在特会がオールドカマーだけをヘイトスピーチのターゲットにしているという誤解を招いている。

しかし、ヘイトスピーチが行われる場面をよ

り詳しくみると、関東圏で最もヘイトスピーチが行われている場所はニューカマーのコリアンタウンともいえる新大久保であり、デモの際の発言やプラカードには「いまだに韓流にハマる日本の汚者＝韓流バカも出て行け」、「韓国人を射殺しろ！ソウルの街を焼き打ちにしろ！火の海にしろ！」などその射程にニューカマーを入れた内容が多くみられる（有田 [2013]）。つまり、韓国人ニューカマーは露骨にヘイトスピーチの対象になっているにもかかわらず、その存在がそれほど可視化されていないのである。

II. 本稿の目的と概要

ヘイトスピーチを行う、もしくは反対する人たちにとってその対象は「在日コリアン」という同じ括りにされてしまう。しかし、ヘイトスピーチがターゲットにするのは在日コリアンだけではなく、すべての在日外国人である。また、在日コリアンといっても、その歴史的な背景からオールドカマーとニューカマーの間には少なくない隔たりが存在する。

「外国人」を考える際、これまではエスニシティという変数だけが過度に注目される傾向があった。しかし、学歴や階層、職業などの多様な要素によって同じエスニシティの中でも個々人が置かれる状況は大きく異なる。特に、就職や移民などで長く居住する場合は、エスニシティ（血統）やナショナリティ（国籍）以外にも言語・価値観・生活習慣などにおいてどのような文化を内在化しているかというのも重要な変

数になりうる（福岡 [1993]）。その場合、母国の価値観や言語が強く固着している壮年層より若年層の方がよりこの変数の影響を強く受ける可能性が高い。

そこで、本稿では、若い韓国人ニューカマーがヘイトスピーチについてどのような認識を持っているかを確認することを目的としたインタビュー調査を通じて、排外主義的な動きに対してその対象になる側がどのような態度を見せており、それが示唆することは何かについて考察する（Ⅲ、Ⅳ）。さらに、それを踏まえたくえでかつてのヘイトスピーチをめぐる議論が孕む問題点や今後の課題について改めて考えてみる（Ⅴ）。

Ⅲ. 「ヘイトスピーチ」をめぐる若い韓国人ニューカマーの認識

関東圏でヘイトスピーチが最も多く行われている場所は新大久保である。しかし、新大久保がコリアタウンとして浮上したのはそれほど古くない。2000年代半ばからK-POPや韓国ドラマなど韓国の大衆文化が世間の注目を集めるようになり、その流れのなかで新大久保は韓国エスニシティの「シンボル」として機能するようになったのである。近年は「韓国ブーム」と言われるほど韓国料理、韓国文化を楽しむため新大久保を訪れる人が増加し、韓国系レストランやスーパー、韓流グッズショップが多い大久保通り、職安通りは、多くの日本人を引き寄せる同時に、ニューカマーの韓国人が最も集まる街になっている。

新大久保には韓国人コミュニティが形成されているがゆえに、日本に生活基盤を持たないニューカマーが定着するには非常に良い環境が整えられている。しかし、だからといって韓国人ニューカマーが新大久保のみを定着地として優先するとは言い難く、来日の目的や個人の好みなど多様な条件によって新大久保以外が生活の

場になるケースも多い。

しかし、本人が韓国人コミュニティに属するか、日本人コミュニティに属するかは、やはりニューカマーの生活全般に与える影響力が大きく、労働や居住などを新大久保で持つか否かはヘイトスピーチに対する彼らの認識に少なくない影響を与える可能性が高い。例えば、新大久保で長い時間を過ごしながらかヘイトスピーチを直接的に目にしたり、その存在をより現実的に感じたりすることによってヘイトスピーチをめぐる認識は変化するだろう。

今回の調査はヘイトスピーチの対象となっている集団の多様性に注意を払うことを志向するため、本稿では新大久保以外で働くニューカマーと新大久保で働くニューカマーの二つの事例⁽³⁾を通じてヘイトスピーチをめぐる若い韓国人ニューカマーの認識を確認していこう。

Ⅲ.1. 新大久保以外で働くニューカマーの事例

多くのニューカマーにとってヘイトスピーチは、その存在は知っているものの実際に見たことはないものである。間接的な経験を持つインパクトも大きい、「帰れ」や「死ね」などの言葉を直接的に聞く（見る）のはより大きな衝撃になるだろう。

では、ヘイトスピーチの主な舞台である新大久保に住まない（行かない）ニューカマー、メディアを通してヘイトスピーチを知ったニューカマーはヘイトスピーチをどう思っているのだろうか。

ニューカマーの多くはヘイトスピーチを行う主要団体が在特会であることや、ヘイトスピーチが狙うのがオールドカマーやニューカマーだけではなく中国人、フィリピン人などの外国人全般であることを知っている。しかし、彼らにとってヘイトスピーチは日本を過剰に愛する一部の人たちの行為とされており、特定な集団に対する差別や排外主義という認識は強くない。

日本に居住して8年になるA氏（女性・30代）の発言はそのような認識を明らかにしている。労働や就職において新大久保とはほぼつながりを持たない彼女の人間関係は、主に会社を中心に構成されている。また、会社の人からヘイトスピーチや歴史問題などに関する話をされたことはないという。

彼女はヘイトスピーチについて「まあ、日本がとても好きな人たちなんじゃないですかね。彼らは日本人が世界で一番優れていると思っっているでしょう？そういう意味で、ヘイトスピーチは日本人以外の人を全部見下す行動かな…」と述べた。言い換えると、それはヘイトスピーチを韓国人が嫌いな人というより、日本が「好きすぎる」人たちによる問題行動として見なしているとも言える。

そのような意味ではカウンター活動はナショナリズムに対する反対運動として評価することができる。A氏はカウンター活動に携わっている人について、「ヘイトスピーチに参加する人がおかしい人たちで、彼らは平凡な人たちじゃないですか。多分カウンター活動とかに参加する人は人種差別を行う日本人が恥ずかしいと思っている日本人でしょうね」と話した。また、カウンター活動が保護しようとするのは人種差別の被害を受けている人や恥ずかしい一部の人のせいで恥をかいている人であり、そのような意味で自分はカウンター活動に参加したいという気持ちはあまりないし、カウンター活動に参加する義務もないと述べた。

ここで注意を払うべき所は、彼女が置かれている状況が多少特別なケースであることである。彼女の職場はいわゆる大手企業で、会社の同僚はほぼ大学院以上の学歴を持っており、年齢的にも30代～40代の若い人が多い。彼女によれば、職場に他の韓国人はいないが欧米人のエンジニアと共同作業を行うこともあるため、そこでは外国人に対する気配りや尊重が重視される

環境が整えられているという。

ヘイトスピーチの問題も含め、これまでの韓国人に関する研究は、新大久保で働く人やエスニックビジネスに携わっている人を中心に行なわれてきた。しかしA氏のケースは、オールドカマー／ニューカマーという差異だけではなく、階級、階層、職業、年齢などによる差異が同じニューカマーの中にも存在し、それによってヘイトスピーチや歴史問題、日韓関係などの諸問題に対する認識にも幅広い差がありうるということを示唆する。

Ⅲ.2. 新大久保で働くニューカマーの事例

次に、新大久保で働きながら、よりヘイトスピーチと身近な距離にあるニューカマーの事例を確認してみよう。B氏（男性・20代）は2009年来日し、現在新大久保の韓国料理店で店長として働いている。彼は来日以来ずっと新大久保で働き続けており、今後も日本に生活拠点を持つ予定である。

韓流ブームがピークだった時期と嫌韓感情が強まっている現在とのお店の雰囲気や顧客の変化について尋ねると、B氏は真っ先に新大久保におけるヘイトスピーチの影響が誇張されている点を指摘した。彼はヘイトスピーチを見たこともあるが、ヘイトスピーチが新大久保地域においてそれほど大きな影響を与えたとは考えていなかった。むしろそれが新大久保地域や新大久保の韓国系ビジネスが孕んでいた問題を隠蔽するためのエクスキューズとして使われている恐れを指摘したのである。彼はヘイトスピーチをどの社会でもある人種差別の問題とみており、そのような認識はA氏と概ね重なっている。

但し、B氏はカウンター活動については「良く知らないですけど、ありがたいです。韓国人としてだけではなく、新大久保で働く人としても感謝しています」と話しており、カウンター活動に対しては同じニューカマーであるA氏と

は異なる認識を持っていた。そこからは職場が新大久保か否かという変数によって韓国人ニューカマーのヘイトスピーチをめぐる認識にはいささか差異が生じる可能性が窺える。B氏はヘイトスピーチに対する規制についても規制をすることによって摩擦が大きくなる恐れを心配し、慎重な姿勢を示していた。

B氏は、日本の国立大学で交換留学をした経験もあり、言語面において不自由はない。昨年には日本人女性と結婚しており、日本人との付き合いも多い方である。しかし、働き場を新大久保で持ち、日常生活の大半を新大久保で過ごしてきたため、韓国人コミュニティ・ネットワークに深い関わりを持っているように推察される。そのため彼は、新大久保は日本社会・日本人からの影響より、韓国人社会・韓国人の影響をより受けていると強く認識していた。新大久保でのお店の経営についても「新大久保では、日本人コミュニティより韓国人コミュニティの影響力が強いです。ここで2年ぐらい居ればほぼこの街のすべての人と知り合いになれるんです。日本社会、日本政府、自治体のどんな装置よりも韓国人コミュニティの中での議論が大事だと思います」と言い、韓国人コミュニティとの関係の重要性を強調した。ここからは彼が韓国人コミュニティと日本人コミュニティを明確に区分しており、その中で自分を位置づけていることが推察できる。

IV. 「われわれ」と「彼ら」という線引き

IV.1. 排外主義としてのヘイトスピーチ

排外主義とは、ネーション（国民）、エスニシティ（民族）、人種などによって「われわれ」と「彼ら」の区分を行い、それに基づいて「彼ら」を差別、周辺化、排除することである。レイシズムも排外主義とほぼ同様の言葉として使われることが多いが、ニュアンスとしては、排外主義は「ネーションの違い」に、レイシズ

ムは「人種やエスニシティの違い」に、それぞれ力点を置いている⁽⁴⁾。また、ナショナリズムとの違いからも排外主義を定義することができる。ナショナリズムはネーションによって「われわれ」と「彼ら」の区分を行い、それに基づいて「われわれ」に肯定的な価値づけを行うが、排外主義はネーションによる「われわれ」と「彼ら」の区分を通して「彼ら」を排除することになる（明戸 [2014]）。つまり、排外主義は「彼ら」の排外に力点があるのに対して、ナショナリズムは「われわれ」の肯定に力点がある。

そのような意味において、「日本人」と「特権を持つ非日本人（主に在日コリアン）」という区分けを設けて非日本人に対する排除を謳うヘイトスピーチは排外主義的な動きとして位置づけることができる。

IV.2. ニューカマーがヘイトスピーチに向き合う態度

今回行ったニューカマーのインタビューの中で際立ったのは、彼らにおいて被害者としての意識というより、ヘイトスピーチから一定程度の距離を置く態度が垣間見られた点である。しかし、ヘイトスピーチの標的にされることは想像以上の恐怖と苦痛をもたらし、その中でそのような態度を見せているのは不思議にも思える。

では、彼らはなぜそれができるのだろうか。まず、考えられるのはヘイトスピーチがどこで行われるのかの問題である。目の前で直接的に暴言を浴びたら、被害者としての意識が強まるのは当然のことであるA氏とは違ってB氏がヘイトスピーチの規制に関して、それに反発してさらに状況が悪化することを恐れていたのも、実際にヘイトスピーチを見たことがあり、ヘイトスピーチが頻繁に行われる新大久保を生活の場にしていたためであろう。しかし、それはあくまでも自分が属している社会で発生した問題

に対してその構成員が見せる態度であることに注意しなければならない。それは京都市などヘイトスピーチが多く行われる自治体がヘイトスピーチに関心を持ち、その規制に慎重に取り組んでいるのと非常に似通っているのである。

もう一つ考えられるのは若いニューカマーが持つ情緒的な特性である。彼らは韓国文化と日本文化を両方習得しているが、だからこそ韓国に帰る機会も多い側面がある。特に、韓国で青少年期を過ごした場合は、現在は日本で暮らしていても、情緒的には日本社会より母国である韓国社会の方に一層コミットメントしている傾向が強い。つまり、彼らのなかでは「われわれ（韓国人・韓国）」と「彼ら（日本人・日本）」の区分が明確になされている。そうすると、ニューカマーは「われわれ（日本人）」と「彼ら（非日本人）」という線引きによる差別的・排除的な処遇を受ける対象にはなるものの、その線引きができるということ、そしてそれが自明視されていることがもたらす精神的な困難からは多少自由であるともいえる⁽⁵⁾。それ故、ニューカマーは標的にされている中でも、一見、奇妙ともいえる冷静な態度をとることができたのである。

しかし、それをもって、ニューカマーはヘイトスピーチから比較的自由であり、おとなしく対処していると即断するのは早い。なぜなら、彼らにとっては積極的に「われわれ」と「彼ら」という線引きを行い、その中で自分の位置づけることがヘイトスピーチから逃れる重要な装置として機能している可能性が高いためである。そのような意味で、インタビューでみられた、ヘイトスピーチは人種差別であることを何回も強調する場面は、むしろ自分たちだけがタ

ーゲットになることを否定したい彼らの強い気持ちの表れではないだろうか。

V. おわりに

今回の調査でニューカマーの認識を取り上げることで見えたのは、ヘイトスピーチの対象となる側の幅がより広く、多様性を持つということである。本稿で述べた「われわれ」と「彼ら」という区分も、実際には「ニューカマーだから容易、オールドカマーだから困難」という風に画一化できるわけではない。それは人によって異なり、その人が置かれる環境によっても変動しうる。そこで指摘できるのは、かつての「在特会」と「在日」、「在特会」と「しばき隊」、「オールドカマー」と「ニューカマー」など安易な二項対立の図式が、ヘイトスピーチをめぐる問題を少なからず歪曲してきた可能性である。特に、被害者としてオールドカマーだけを浮き彫りにしてきた傾向が、かえってヘイトスピーチをオールドカマーだけの問題に留まらせ、この問題の責任や解決を被害者の一部であるオールドカマーに背負わせてきた点は否定しがたい⁽⁶⁾。

しかし、排外主義の矛先はオールドカマー、外国人だけではなく、「われわれ」と「彼ら」という線引きを通じて例えば、被差別部落出身者やアイヌ民族、障害者、女性など誰にでも向けられうる（前田編 [2013]、好井 [2015]）。そう考えると、主に在日（もしくは外国人）のための措置として思われてきたヘイトスピーチへの規制もより普遍的な措置として位置づけることができるだろう。

今回の調査は多くの課題を残しながらも、ヘイトスピーチをめぐる議論の幅をより広げるにおいて一つの示唆を与えると思われる。

註

1. 一般的に在日韓国・朝鮮人や台湾人など旧植民地出身者及びその家族をオールドカマーに、新しく渡日してきた人々やその家族をニューカマーに分類する（国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編 [2010: 83]）。
2. 「カルデロン一家追放」デモ、京都朝鮮第一初級学校襲撃事件、徳島県教組乱入事件、フジテレビ抗議デモ、ロート製薬強要事件など。
3. A氏：2015年2月28日・吉祥寺、B氏：2014年8月31日・新大久保にてインタビューを実施した。
4. 但し、日本の場合は排外主義とレイシズムの範囲がほぼ重なる。ヘイトスピーチとレイシズムの関係性に関するより詳しい議論は金編（2014）を参照されたい。
5. ここでいう「線引きによる被害」とは、外国人と区別されることによって被る差別、排除のことである。それに対して「線引き自体がもたらす被害」とは、例えば、ヘイトスピーチをめぐる議論が自然に「日本人と非日本人」という線引きを前提にするなど、日本人と非日本人の区別が自明視され、その間の存在の可能性を認めないことからくる困難を指している。
6. 改めて断っておくが、今回の調査は一部のニューカマーを対象としており、これをもってニューカマー全体の認識を断定することはできない。また、本稿が注目したかったのはヘイトスピーチの対象になる側の中でもヘイトスピーチと向き合う態度は決して一枚岩ではないことであり、それがどちらの態度がより良いかのような間違った議論へとつながることに關しては最も注意を払わなければならない。

文献

- 有田芳生 (2013) 『ヘイトスピーチとたたかう！—日本版排外主義批判』 岩波書店。
- 明戸隆浩 (2014) 「現代日本のヘイトスピーチ問題—〈在特会〉を前提にした多文化社会のために—」 立教大学 佐々木ゼミ講演資料。
- 金尚均編 (2014) 『ヘイト・スピーチの法的研究』 法律分化学社。
- 国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編 (2010) 『在日コリアン辞典』 明石書店。
- 中村一成 (2014) 『ルポ 京都朝鮮学校襲撃事件—〈ヘイトクライム〉に抗して』 岩波書店。
- 野間易通 (2013) 『「在日特権」の虚構：ネット空間が生み出したヘイト・スピーチ』 河出書房新社。
- 樋口直人 (2014) 『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』 名古屋大学出版会。
- 福岡安則 (1993) 『在日韓国・朝鮮人』 中央公論。
- 前田朗編 (2013) 『なぜ、いまヘイト・スピーチなのか』 三一書房。
- 松岡瑛理 (2014) 「反レイシズム運動を支える人々」 関西社会学会発表資料。
- 安田浩一 (2012) 『ネットと愛国』 講談社。
- 好井裕明 (2015) 『差別の現在』 平凡社。
- 山崎望編 (2015) 『奇妙なナショナリズムの時代：排外主義に抗して』 岩波書店

受稿2016年1月8日／掲載決定2016年2月1日